

SRID NEWSLETTER

No. 334 SEPTEMBER 2003 国際開発研究者協会 創設者大来佐武郎
〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

9月号

対アフリカ援助雑感

国際開発ジャーナル主幹 荒木 光弥

国際協力フェスティバル参加にあたって

東京大学大学院理学系研究科 野上孝也 (学生部代表)

お知らせ

1. 会員異動 加賀美充洋氏 在ニカラグア大使館
Ambassador、 Embassy of Japan, Managua, Nicaragua
2. 幹事会
9月26日(金) FASID にて予定
3. SRID 婦人クラブバザー
恒例になりましたバングラデシュの小学校支援資金のためのバザーが、
10月11、12日に自由が丘で開かれます。
ご自宅に眠っている海外のおみやげなどありましたら、9月30日までに
〒107 - 0062 港区南青山 6 - 12 - 3 - 804 三上 洋子 あてに
お送り下さい。
ご協力をお願い致します。

対アフリカ援助雑感

国際開発ジャーナル主幹 荒木 光弥

第3回の東京アフリカ開発会議が開かれる。しかし、世間の感度は鈍い。オピニオン・リーダー層にしても“援助疲れ”を感じているようである。実は何をかいわん、筆者も“アフリカ援助疲れ”を感じている一人で、なかでも“アフリカ開発会議”ともなると、その疲労感は募る一方である。そうした気持ちも含めて、ここでは対アフリカ援助雑感を述べてみたいと思う。

「なぜアフリカを援助するのか」と聞かれたら、個人レベルではいろいろな見解をもっていると思うが、ODAは外交の重要な手段という立場では、まず最初に「国連外交に必要な票田維持のため」というだろう。アフリカ53カ国の53票は国連外交を有利に展開する上で欠かせない要素である。WHOやユネスコ事務局長に日本人を送り込む時は、日頃からの援助が効力を発揮した。時には鯨問題で一票を援助と引き替えにしたいと申し出るアフリカの国もある。マスコミには「援助で一票を買うのか」と批判されることがあるが、この場合、外交官が援助を武器にある種の強引な工作を行った時である。

しかし、外交上の掛け引きにおいて援助（ODA）は暗黙の圧力になる。したがって、それが国民の利益になるならば、そうした効用は認めざるを得ない。ところが、アフリカ53カ国の国連一票を有する現政権をみると、援助理念から決して好ましくない政権も多い。どこまで国造りを真剣に考え、広く民衆のための開発政策を遂行しているか疑わしい政権が目立ち、時に部族主義的な政権擁護のため、外国からの資源開発利権料は言うに及ばず、外国からの援助資金まで一族郎党のために浪費する。

特に日本の二国間援助はアフリカに資源や貿易面で利害関係が少ないので票田工作を狙ったケースが多い。そうすると、政権の「良い統治」、「悪い統治」に関係なく援助することになる。こうした援助がすべて無駄とはいわないが、国内紛争などが加わって無に帰するケースが多々あった。国連外交一票のために、日本国民の税金が無造作に使われることになる。それでは納税者は黙ってられない。

ただし、もし日本政府が本気になって国連改革に取り組んで、50年前の“敵国条項”の排除はいうまでもなく、平和勢力の旗を掲げて国連常任理事国入りを決意するならば、目標を定めた国連外交のために、ある意味で援助効果が薄いとは思いつつも、国連一票のための援助を認めざるを得ないだろう。そうした姿が明

確にならないままに、アフリカ援助をこのまま続けることに大いなる抵抗感を持つ。

したがって、もし対アフリカ援助を転換するならば、イギリスが目下音頭をとっている援助協調による「コモン・バスケット方式」で効率的、効果的にアフリカ援助を行うことも重要な日本の選択肢といえる。イギリスは援助国がアフリカに限って自国の旗を降ろしてバラバラに援助するのではなく、まずドナー各国の援助資金を共通の一つのバスケットに入れて、開発手順通りに合理的に援助資金を活用しようと提案している。

援助競争力という面では、たしかに日本は欧米にかなわない。それでも技術面では欧米に比べて決して引けはとらないものの、アフリカの混迷を深めている、いわゆる部族問題と紛争問題や紛争解決と統治問題、そのシステムづくりなどは、日本が一番不得意とするところである。何百年も支配してきたヨーロッパが手を焼いているのに、日本がどこまで対応できるかは改めて論ずるまでもない。

ここは、まずドナー諸国との援助協調に譲り、二国間ベースでは最も得意な分野を重点的に、かつモデル的にこれまでのアフリカ友好国を対象に続けることを提言したい。

アフリカ開発は 50 年以上も絶え間なく続いた紛争で荒廃した国土と人間を相手にしなければならない。たとえば、対人地雷除去だけでも 100 年以上かかる国もある。ましてや小型武器狩りなどはどういう手順で進めるか、想像できないほど難しい。

その意味で、東京アフリカ開発会議を振り返ると、関係者がアフリカの真実をどこまで理解して開催してきたのか、その真意がわからない。特に、「開発というフレームワーク」のなかで紛争問題をヒモ解こうとしているが、筆者は論点として、「紛争問題のフレームワーク」のなかで開発を考えるという逆転の発想が必要ではないかと思う。異なる部族のアイデンティティーが紛争の原点になっているならば、開発問題こそこの原点を十分考慮しなければならない。そういう雑感を第 3 回東京アフリカ開発会議に抱いたしだいである。

国際協力フェスティバル参加にあたって

東京大学大学院理学系研究科 野上孝也 (学生部代表)

「国際協力フェスティバル」が10月4日(土)、5日(日)に日比谷公園にて開催される予定です。国際協力フェスティバルとは、国際協力NGOセンター(<http://www.janic.org>)が事務局となって、100以上のNGOや政府機関(JICAやJBIC)が参加し、市民に対して国際協力への理解・参加を促すためのイベントです。

(詳しくはこちら⇒ <http://www1.jca.apc.org/icf/>)

このフェスティバルで学生部はSRID(学生部)の活動の展示・紹介を行いたいと考えております。また、学生・社会人を問わず国際協力に興味を持った人が大勢参加するイベントですので、活動の紹介のみならず、メンバーの募集・勧誘や、他の団体との交流も行いたいと思います。

今年度から外務省からの予算が削減されるとのことで、規模の縮小にともなって参加基準が厳しくなり、学生部単独の参加は無理と判断いたしまして、本会の名前をお借りして参加の申し込みをさせていただきました。当初は、「NGO」としての参加を考えておりましたが、参加基準が厳しくなったため選考にもれてしまいました。そこで、再度「国際協力機関・他」というカテゴリーで申し込んだところ、参加の許可が得られ、これから準備に取り掛かろうとしているところです。

せっかくの活動のアピールが出来る機会ですので、本会の皆様もSRIDの活動内容の発表・展示などをご検討いただけたらと思います。学生部もお手伝いいたします。

ご意見、ご質問ございましたら私(tnogami@sys.eps.s.u-tokyo.ac.jp)までご連絡ください。よろしくお願いいたします。